

「歌占」の鶯の歌

松岡心平

「歌占」は、和歌による占いを通じての父子再会劇だが、占師渡会家次(シテ)の前で白山鶯の住人(ツレ)の引き当てる短冊の歌、

北は黄に南は青く東白西紅にそめいろの山

と同様、幸菊丸(子方)の引く、

鶯の卵かひどの中なのほととぎすしやが父に似てしやが父に似ず

もまた、一風変わった歌である。

鶯の歌については、『謡曲大観』『歌占』の頭注に「万葉集卷九高橋虫麻呂歌集の『鶯のかひこの中に、雲公独り生まれて、しが父に似ては鳴かず、しが母に似ては鳴かず』云々とある長歌を短歌に改作したのである」という指摘があり、古典大系本『謡曲集』上もこれを踏襲するが、「謡曲以前に、この形で広まっていた歌の転用であらうか」(補注二一〇)とも付け加えている。

謡曲以前の短歌の形での流布ということでは、古今集の注釈の世界が注目される。

『昆沙門堂本古今集注』は、古今集一四一

番のほととぎすの歌の注の末尾で、ほととぎすの十番目の異名「イモセ鳥」につき、次のように記している。

十二ハ、イモセ鳥ト云者、此鳥極テ嫁ニタヘヌ鳥ニテ、アマリニセチナル時ハ、鶯ニモトツク故ニ、イモセ鳥ト云也。万葉云、

鶯之□之中霍公者之父似天鳴賀者母似鳴賀

また、天理図書館蔵『古今秘註』の同箇所注にも、次のような類説がのる。

十二ニ、コヒシ鳥、コノトリ、キハメテトツギニタヘヌ鳥ニテ、アマリセツナルトキハ、ウグヒスニトツグトイフ。カルガユヘニ、ウグヒスノカヒコノナカニホト、ギスアリト云。万葉ニ、

ウグヒスノカヒコノナカノホト、ギスシヤガチ、ニシテシヤガハ、ニシテトイヘリ。

(片桐洋一『中世古今集注釈書 解題二』所引の本文に拠る)

両注ともに、鶯の歌は、万葉集の長歌が短歌の形に切り出されているようにも読めるが、確定はできない。

ところが、応永十三年(一四〇六)奥書の了誉聖閣による『古今序注』では、明らかに、独立した短歌一首の形で鶯の歌が引かれている。それは、古今集仮名序の「今は富士の山も煙立たずなり」という文句についての注の中にあり、かぐや姫が鶯の卵から生まれたという、中世的『竹取物語』とからめられている。

抑、富士ノ煙之事、雄略天王ノ御時ヨリ富士ノフモトニ婦夫二人ノ者住ケリ。四方ニ竹ヲ植テ毎一年一方ツツ竹ヲ切テウツテ渡世ノ計ニアテケレバ、管竹翁トソ人ノ呼ケル。亦ハ作竹尉トモ申シケル。アル時、竹ノ中ニテ鶯ノ巢ノ内ニ郭公ノ卵ノ一ツ残りタリケルヲ見ツケテ嬭婆ニ云ケルハ、
鶯ノ卵ノ内ノ時鳥者ガ父ニ似テ者ガ母ニ似ズ
ト云歌アリ。イサヤ郭公ノ鶯ノ腹ニ宿レル子ノ巢立ヲ見ントテ、綿ニクルミツ、懐ニ入テ暖ケレバ、日ヲ重テ卵開テ、中ヨリイタイケシタル人ノ質出タリ。見レバ女子也。老人ドモ悦ビ恠ミテ是ヲ養フニ、ホドナク成人ス。形貞端正ニシテ光

アタリヲ照シケレバ、カグヤ姫トソ名ケル。

(前掲書所引の本文に拠る)

右の鶯歌の末句の「母」を「父」に直すと、即「歌占」の鶯歌がみちびかれる。「歌占」の作者観世元雅が、頓死から三日後に蘇り白髪となった占師すなわち幸菊丸の父親、という能の設定に合わせて、流布の歌形の「母」を「父」に意識的に改変し、「しゃが父に似てしゃが父に似ず」とした、と見たい。

ところで、鶯の卵から生まれたかぐや姫という『竹取物語』の中世の変奏は、古今集仮名序の「富士の煙によそへて人を恋ひ」「今は富士の山も煙立たずなり」等の文言をつぶさに説明しようとする中世和歌独特の注釈世界において生じ、世阿弥作「富士山」もこの世界を背景に成立していることが、伊藤正義氏によって指摘されている(『謡曲〈富士山〉考―世阿弥と古今注―』『言語と文芸』64号、昭44・5)。

さらに、伊藤氏は、「中世日本紀の輪郭―太平記における卜部兼貞説をめぐって―」(『文学』昭47・10)で、歌学と日本紀注と神道説の融合した中世の神代紀のすがたは、日本書紀原典とは大きく隔り、いわば中世日本紀が形成されていると説き、「歌占」のサシ、

それ歌は、天地開けし始めより、陰陽の

二神、天の巷に行き逢ひの、さ夜の手枕結び定めし、世をまなび国を治めて、今も道ある妙文たり。

の背景にも、中世日本紀の世界があることを述べている。

サシを語るシテは、伊勢の神職渡会家次であり、渡会家自体、じつは古今集の注釈とも相互交渉する中世日本紀世界の担い手であった。

シテ渡会家次が歌占いのために用意した短冊歌の一つ「鶯の卵の中のほととぎすしゃが父に似てしゃが父に似ず」が、古今注の世界の中にひろがる和歌に酷似していても不思議はない。そして、世阿弥のみならず元雅の能にも、古今注はその影を落としているのである。(東京大学助教授)

